

【原著論文】

ホームヘルパーの困難に対する楽観的解釈とスピリチュアルな感覚との関連

広瀬美千代*

Relationship between home helper's "optimistic interpretation of difficulties" and the "spiritual sense"

Michiyo Hirose

要 旨

目的 「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」を測定する尺度を開発し、「困難の楽観的解釈」との関連を検討することであった。

方法 A 県内の訪問介護事業所のホームヘルパー 600 名を対象とする自記式郵送調査を行い、有効回収率は 24.8% となった。ホームヘルパーの困難に対する楽観的解釈がスピリチュアルな感覚を規定するといった因果関係モデルを構築し、構造方程式モデリングを用いてデータに対する適合度を確認した。

結果 「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」に対して確証的因子分析を実施した結果、統計学的水準を満たし、「人生の意味」、「関係性における調和」の 2 因子で構成されることが確認された。また「困難の楽観的解釈」との間には、有意な関連が確認された。

結論 本尺度は十分な妥当性と信頼性を有している。結果から、楽観的な態度や意識が、死に直面している要介護高齢者をケアする者が持つスピリチュアルな感覚に寄与する可能性が示唆された。

Abstract

Purpose. The objective of the current study was to develop a scale for measuring a home helper's "spiritual sense" and examine the relationship between the "optimistic interpretation of difficulties" and this scale.

Method. The self-administered mailed survey was sent to 600 home helpers working at the home help service stations in A prefecture. The response rate was 24.8%. This analysis adopted the data of only 135 home helpers. The relationship between the "optimistic interpretation of difficulties" and a home helper's "spiritual sense" was examined as a causal model by using structural equation modeling.

Result. The results indicated the following: 1) the current scale was confirmed in terms of construct validity by a confirmatory factor analysis, and consisted of two factors, "meaning in life" and "harmony in the relationship" and 2) a home helper's "spiritual sense" was significantly associated with the "optimistic interpretation of difficulties."

Discussion. This scale has sufficient validity and reliability to measure the spiritual sense of home helpers. In

受付日 2018. 9. 14 / 受理日 2019. 1. 11

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授

conclusion, an optimistic attitude could contribute to having an awareness of the spiritual meaning of caring for elderly individuals facing death.

● ● ○ **Key words** ホームヘルパー home-helper/スピリチュアリティ spirituality/人生の意味 meaning in life/楽観的態度 optimistic attitude/構造方程式モデリング structure equation modeling

I. 研究背景と目的

我が国では高齢化が進み、2015年には高齢者人口は3384万人で、総人口に占める割合は26.7%となり、2年連続して4人に一人が高齢者となった¹⁾。それと共に、「在宅介護」という社会問題を表す用語も1980年代以降、急速に広く使われるようになった²⁾。

2000年に施行された介護保険制度はその後、幾度かの改正を経たが、①高齢者ケアのニーズの増大、②単独世帯の増大、③認知症を有する者の増加と共に、④医療度の高い要介護高齢者に対する在宅介護がより必要となっている。このため、2014年に策定された地域包括ケアの推進（介護保険事業状況報告）³⁾においては、医療と介護の連携の強化等の他、介護人材の確保とサービスの質の向上がより一層、強調されるようになった。

また自分が要介護になった時の希望として、厚生労働省は「家族に依存せずに生活できるような介護サービスがあれば自宅で介護を受けたい」と考える者が46%と報告しており⁴⁾、在宅での看取りも視野に入れた政策が急がれる中で、今後益々ホームヘルパー（訪問介護員）に求められる資質は高まる一方であるといえる。

このような状況の中で、様々な喪失を体験していく高齢者の中でも特に、死を意識し始める要介護高齢者と、多くは一人で向き合う形をとるホームヘルパーは、高齢期に特有なアイデンティティを持つ利用者を理解してケアにあたることが求められると言える⁵⁾。

一方、福祉を担う支援専門職は、要介護高齢者や利用者の生活の質（QOL）を確保していく立場にあるが、このQOLに身体、心理、社会的領域の次にspirituality（スピリチュアリティ）が第4の領域として加えられるになって久しい⁶⁾。1999年の第52回世界保健会議において、「スピリチュアルな側面での健

康」が議論されて以来、スピリチュアリティは人間の尊厳の確保やQOLを考えるのに必要な本質的な感覚であるという意見が出されている⁷⁾⁸⁾。

このような背景から、介護を担う者は、要介護高齢者に対する畏敬の念を持ち、それを「看取り」や「死」の場面における「スピリチュアルケア」として実現していくことが理想的なケアであると考えられる。例えば、利用者は「いつお迎えが来てもいいように、」や「早く死にたい」というような死を意識した言葉を良く用いることがあり、それにホームヘルパーはうまく対応していかなければならない。また、看取り場面では利用者の家族の心理を受容し、その人にしかわからない深い気持ちに共感することが求められる。このように「死を意識した苦悩の状況にいる者」へのケアとして、ホームヘルパーも、スピリチュアルな感覚をもってケアを実践することが望まれるといえる。

浅賀⁹⁾は「スピリチュアルケアのゴールは、人生の最終段階にある人々が、最後まで生きるための希望や力を失わないで、自分に与えられた人生の意味や目的を見出しつつ、あるいは確認しつつ、その人らしく生きていけるように援助ができることである」と述べている。

日本人高齢者のスピリチュアリティに関する概念はその捉えかたが多岐に渡っている⁹⁾。岡本¹⁰⁾は、高齢者の生活上のスピリチュアルなテーマとその位置づけとして、生きる意味を見出す次元の中で「人生の出来事を乗り越えてきた」というテーマに関して、過去において体現した出来事の統合が再評価や自己肯定をなしていると述べている。このような結果は、人生の辛苦を経験して得るものとスピリチュアルな感覚が無縁ではなく、むしろ両者が互いに関係して起こりうるという可能性を感じさせる。

以上のような背景から、スピリチュアリティを、生きる意味や価値など人間本来の持つ本質の側面と捉え

ると、在宅で要介護状態となって暮らす高齢者の生活支援を行うホームヘルパーが持つこのようなスピリチュアルな感覚に関して検討することには、意義があると考えられる。本稿ではこのような感覚を「スピリチュアルな感覚」と表したうえで、「人生における意味と他者との関係から見出す調和や絆」と定義し、ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚を構成する要素を明らかにすることとする。

他方、その関連要因として、近年の福祉領域や心理学領域でのポジティブな捉え方¹¹⁾に向けた介入の視点からも、本稿ではホームヘルパーの心理にある介護状況への肯定的な評価に対する研究視点の動向に着目し、介護業務から生じる困難な事態に対処する態度として楽観的な視点¹²⁾からの検討を試みたい。このことに関して、理論となるモデルが存在していないことから、本研究において両概念間の関係を探索的に導き出していくこととする。よって本研究では、ホームヘルパーが認識するスピリチュアルな感覚の因子構造を確認し、それに関連する要因として、予測のできない事態にも柔軟性を持ち、困難な状況にもうまく対応していける楽観的な態度との関連を検討することとする。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象および調査方法

本研究は、訪問介護事業所に勤務するホームヘルパーを対象に実施した。WAM-NET (2013年4月1日時点) に登録されているA県内の訪問介護事業所から300カ所の事業所を無作為抽出し、調査票を各2通同封し、600名を対象とする自記式郵送調査を行った。調査期間は2013年5月1日～5月31日とし、回収数149通、回収率は24.8%となった。

2. 調査内容

調査票は、調査対象者の属性、ホームヘルパー業務に対する「困難の楽観的解釈」、ホームヘルパーの「スピリチュアルな感覚」などの調査項目で構成した。なお、本研究の調査項目の選定にあたり、基礎調査としてホームヘルパー7名に対して業務における突発的な出来事や困難に対する肯定的解釈、意味づけ、そこから生まれる学びや価値、スピリチュアルな感覚など

に焦点をあて、インタビュー調査を行った。そしてそのすべての語りから困難状況を乗り越えていくための方策や考え、また得られたスピリチュアルな感覚、価値観などを整理しカテゴリー化している。

1) 調査対象者の属性

ホームヘルパーの属性には、性別、年齢、所持資格、ホームヘルパーとしての経験年数を設定した。また所持資格は2013年5月の時点で適用されている資格を尋ねた。

2) ホームヘルパー業務に対する「困難の楽観的解釈」

本研究では「困難の楽観的解釈」を「ホームヘルパーが業務上起こりうる困難な事象に対してもつ楽観的な態度や問題を前向きに解決しようとする意識」と定義した。またその測定には、広瀬¹²⁾によって開発された「ヘルパー業務楽観的態度」尺度の下位概念（「困難の楽観的解釈」）を構成する7項目を用いた。本尺度は、検証的因子分析により、因子的妥当性が支持されており¹²⁾、ホームヘルパーの「困難な状況や心労となる要因そのものに対する楽観的な捉え方や態度」を最もよく表していると判断したことから、本研究で採用した。回答は、「とてもそう思う；4点」「まあそう思う；3点」「あまりそう思わない；2点」「まったくそう思わない1点」の4件法で求めた。

3) ホームヘルパーの「スピリチュアルな感覚」

本研究では「スピリチュアルな感覚」を「人生における意味と他者との関係から見出す調和や絆」と定義した。本定義に基づく、ケアする者としてのホームヘルパーが持ちうる「スピリチュアルな感覚」を測定するための尺度は、先行研究からは確認されなかった。そのため、インタビュー調査で得られたスピリチュアルな感覚に関するカテゴリーを基に、竹田ら¹³⁾が在宅高齢者を対象に開発したスピリチュアリティ健康尺度をある程度参考にして、質問項目の作成を試みた。特に、竹田ら⁷⁾の尺度を構成する下位因子である「生きる意味・目的」「他者との調和」「よりどころ」は、要介護高齢者の介護に携わるホームヘルパーにとって必要な感覚であると判断したことから、本研究で参考にとすることとし、「どんな相手でも分けへだてなく受け入れ入れようと思う」「大切な人との絆が生きていく

うえでの支えとなっている」「年を取るごとに感謝の気持ちが強くなる」などの9項目を設定した。また項目作成の過程においては、高齢者福祉分野の研究者およびサービス提供責任者による項目のエキスパートレビューを受け、必要に応じて修正を行い、内容妥当性の保持に努めた。回答は、「とてもそう思う：4点」「まあそう思う：3点」「あまりそう思わない：2点」「まったくそう思わない1点」の4件法で求めた。

3. 解析方法

統計解析には第一段階として、ホームヘルパーの「スピリチュアルな感覚」を構成する因子を検討するため、探索的因子分析（Promax回転）を行った。また探索的因子分析には、カテゴリカルデータに最適な推定法である重みづけ最小二乗法の Weighted Least Square parameter estimates using a diagonal weight matrix with robust standard errors and mean-and variance-adjusted chi-square test statistic（以下、WLSMVとする）を用いた。また探索的因子分析による因子数は、Kaiser-Guttman基準ならびに固有値の減衰状況などにより判断した。WLSMVをパラメータの推定法に用い、抽出すべき因子数はKaiser-Guttman基準ならびに固有値の減衰状況を参考に判断した。

第二段階として、前項の探索的因子分析によって抽出された「スピリチュアルな感覚」の因子の因子的妥当性を検証するため、抽出された因子を下位因子とする斜交モデルを設定し、構造方程式モデリング¹⁴⁾¹⁵⁾を用いてデータに対する適合度を検討した。

第三段階として、看護師ががん患者を看護しながら関わる中で体験する困難状況で獲得する肯定的な認知や感情が態度や意識を規定するといった研究¹⁶⁾を参考に、ホームヘルパー業務に対する「困難の楽観的解釈」を独立変数、ホームヘルパーの「スピリチュアルな感覚」を従属変数とした因果関係モデルを構築した。また、ホームヘルパーの性別（男性：0点、女性：1点）、年齢、経験年数を統制変数として投入し、WLSMVを推定法に構造方程式モデリングを用いて、モデルの適合度と各変数間の関係性を検討した。また本分析に先立ち、ホームヘルパー業務に対する「困難の楽観的解釈」について1因子モデルを設定し、WLSMVをパラメータの推定法に、構造方程式モデリングを用いて確証的因子分析¹⁷⁾を行った。

なお上記の構造方程式モデリングにおけるモデル適合度の評価には、 χ^2 値（以下、 χ^2 とする）、自由度（以下、dfとする）、Comparative Fit Index（以下、CFI）、Root Mean Square Error of Approximation（以下、RMSEA）を用いた。 χ^2 をdfで除した値（以下、 χ^2/df ）は、小さいほどモデルのデータに対する適合度が高いことを示し、CFIは一般的には0.950以上であればそのモデルがデータをよく説明していると判断され¹⁸⁾、RMSEAは0.100以上であればそのモデルを採択すべきでないとされる¹⁹⁾。また本研究に用いたすべての尺度の信頼性については、Cronbachの α 信頼性係数により検討を行い、パス係数の有意性は5%有意水準とした。

以上の解析には、統計ソフト「IBM SPSS 23 J for Windows」ならびに「Mplus version 7.4」を用いた。

4. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、調査対象者に対して調査の趣旨、調査協力への自由意志（任意）の保障、匿名性の保持、研究目的以外でデータを使用しないこと等について明記し、同意を得られた場合は無記名で返送を依頼した。また、本研究は大阪市立大学の倫理委員会に申請し、2013年3月12日に審査・承認を受けて実施した（申請番号12-41）。

Ⅲ. 結果

1. 分析対象者の属性

分析対象者であるホームヘルパー135人のうち、女性は114人（84.4%）であり、年齢は平均45.9歳（標準偏差；10.8）であった。ホームヘルパーの経験年数は平均5.9年（標準偏差；4.0）であり、3年未満であった者が3割以上を占めていた。

2. 「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」の回答分布および妥当性と信頼性の検討

「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」に関する回答分布は表1に示すとおりである。本尺度の因子構造を検討するため、アイテムプールした9項目を用いて探索的因子分析を行った。その結果、因子の固有値は第3因子以降で1.0未満であり、「ホームヘルパ

表1 「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」に関する回答分布 (n=135)

項目	とても そう思う	まあ そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
SP 1 どんな相手でも分けへだてなく、受け入れようと思う	41 (30.4)	82 (60.7)	11 (8.1)	1 (0.7)
SP 2 心の深いところにある思いを他者と語りあうことがある	18 (13.3)	76 (56.3)	39 (28.9)	2 (1.5)
SP 3 これまでの人生での出来事や思いを語ることで人生の意味を確認したことがある	21 (15.6)	72 (53.3)	36 (26.7)	6 (4.4)
SP 4 年をとるごとに感謝の気持ちが強くなっている	40 (29.6)	73 (54.1)	19 (14.1)	3 (2.2)
SP 5 この世には自分しかできない使命や役割があると思う	30 (22.2)	57 (4.2)	41 (30.4)	7 (5.2)
SP 6 日々の生活の中に楽しみや希望がある	48 (35.6)	69 (51.1)	17 (12.6)	1 (0.7)
SP 7 家族や友人との良好な人間関係を保つことを心がけている	53 (39.3)	77 (57.0)	3 (2.2)	2 (1.5)
SP 8 他者への思いやりや感謝の気持ちを持つことで、人間関係を円滑にしている	47 (34.8)	82 (60.7)	5 (7.7)	1 (0.7)
SP 9 大切な人との絆が生きていく上での支えになっている	61 (45.2)	66 (48.9)	6 (4.4)	2 (1.5)

表2 「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」の探索的因子分析

項目	抽出された因子	
	生きる意味	関係性 における調和
SP 1 どんな相手でも分けへだてなく、受け入れようと思う	0.431	0.104
SP 2 心の深いところにある思いを他者と語りあうことがある	0.759	-0.197
SP 3 これまでの人生での出来事や思いを語ることで人生の意味を確認したことがある	0.772	0.019
SP 4 年をとるごとに感謝の気持ちが強くなっている	0.389	0.327
SP 5 この世には自分しかできない使命や役割があると思う	0.777	-0.068
SP 6 日々の生活の中に楽しみや希望がある	0.315	0.557
SP 7 家族や友人との良好な人間関係を保つことを心がけている	0.083	0.841
SP 8 他者への思いやりや感謝の気持ちを持つことで、人間関係を円滑にしている	-0.115	1.073
SP 9 大切な人との絆が生きていく上での支えになっている	-0.046	0.853
	因子相関行列	1.000 0.531
	固有値	4.488 1.546
	因子寄与率 (%)	49.867 17.178

(Promax 回転)

因子負荷量が 0.350 以下を削除
推定法は WLSMV

一のスピリチュアルな感覚」は2因子構造が妥当であると判断した(表2)。また Promax 回転後の因子パターン行列を確認し、因子負荷量が 0.35 以上を採用したところ、共通性が 1 を超える値が抽出されたが、斜交回転では超えることの可能性も示されていることから採用とした²⁰⁾。

抽出された二つの因子は、第1因子で「どんな相手でも分けへだてなく、受け入れようと思う」「これまでの人生での出来事や思いを語ることで人生の意味を確認したことがある」などの5項目によって構成され、「生きる意味」と解釈された。第2因子は「家族や友人との良好な人間関係を保つことを心がけている」「他者への思いやりや感謝の気持ちを持つことで、

人間関係を円滑にしている」などの4項目によって構成され、「関係性における調和」と解釈された。(表1、表2)

さらに「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」における「生きる意味」「関係性における調和」を下位因子とする2因子斜交モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて因子的妥当性について検討した。その結果、モデルのデータに対する適合度は $\chi^2(df) = 70.332 (26)$, CFI=0.968, RMSEA=0.112 と統計学的な許容水準を満たしていなかった。そこで、Mplus が算出する修正指標を参考に「この世には自分にしかない使命がある」と「日々の生活の中に楽しみがある」の誤差間に共分散を認めた。この2項目は、高齢にな

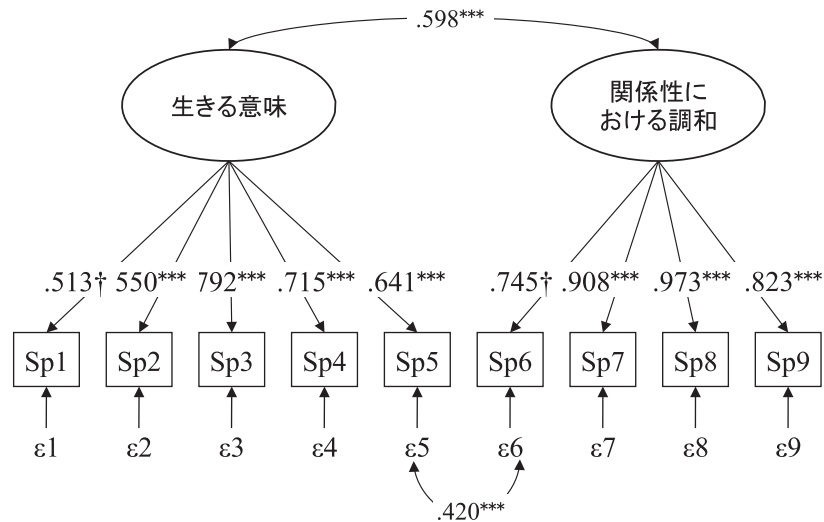


図1 「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」の因子構造モデル（標準化解）
 n=135 : $\chi^2(df) = 57.980 (25)$ CFI=0.976 RMSEA=0.099（推定法：WLSMV）
 ※ε は誤差変数
 ※†はモデル識別のために制約を加えた箇所である。
 ※*** : $p < 0.001$

るに従って、生活面などで活力や能力が低下している中においても、自らが意欲や楽しみを感じてできる役割や使命があるという見方をするという共通の感覚を表していると捉えられる。この共分散を認めて再度分析したところ、 $\chi^2(df) = 57.980 (25)$, CFI=0.976, RMSEA=0.099 と統計学的な許容水準を満たしていた(図1)。また、本尺度における α 信頼性係数は「生きる意味」が0.716、「関係性における調和」が0.843であった。(図1)

3. 「困難の楽観的解釈」の回答分布および妥当性と信頼性の検討

「困難の楽観的解釈」に関する回答分布は表3に示すとおりである。先行研究に従って「ヘルパー業務楽

観的態度」について1因子モデルを設定し、因子の妥当性について検討したところ、統計学的な許容水準を満たさなかった。そのため、各項目が示す内容を精査し、複数の項目の誤差間に共分散を認めた。この複数の項目に関しては、まず、「利用者の態度から不満やストレスがあると感じてもその感情を受け止めることができると思う」と「利用者に理解してもらえないことがあれば、試行錯誤していくことで良い方向に変化が生じてくると思う」は、ホームヘルパーの支援の意味や方法への理解が利用者側に得られなくても、この二者間の関係性を崩さずにいたいというホームヘルパーの思いが共通にあるといえる。また、「利用者や家族からの無理な要求にも誠実に耳を傾けている」と「業務でつらいことがあっても前向きに捉えていける

表3 「困難の楽観的解釈」に関する回答分布 (n=135)

項目	とても そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
op 1 利用者の態度から不満やストレスがあると感じてもその感情を受け止めることができると思う	45 (33.3)	81 (60.0)	9 (6.7)	0 (0.0)
op 2 利用者に理解してもらえないことがあれば、試行錯誤していくことで良い方向に変化が生じてくると思う	42 (31.1)	85 (63.0)	8 (5.9)	0 (0.0)
op 3 うまくいかない時は困難ではなく、解決すべき課題ととらえる	25 (18.5)	85 (63.0)	23 (17.0)	2 (1.5)
op 4 いやな経験も利用者支援の通過点と受け止めることができる	26 (19.3)	90 (66.7)	17 (12.6)	2 (1.5)
op 5 利用者や家族からの無理な要求にも誠実に耳を傾けている	22 (16.3)	91 (67.4)	22 (16.3)	0 (0.0)
op 6 業務でつらいことがあっても前向きに捉えていけると思う	36 (26.7)	81 (60.0)	18 (13.3)	0 (0.0)
op 7 利用者から嫌なことを言われても、利用者にとって一番有益なことを考えるようにすると思う	33 (24.4)	87 (64.8)	25 (18.5)	1 (0.7)

と思う」の2項目や、「業務でつらいことがあっても前向きに捉えていけると思う」と「利用者から嫌なことを言われても、利用者にとって一番有益なことを考えるようにすると思う」の2項目間においても、ホームヘルパーは、感情に流されず、利用者の立場に立って問題を解決しようとする前向きな共通の意識が感じられる。

このようなことから、これらの項目間の共分散を認めて再度分析したところ、 $\chi^2(df) = 17.127 (11)$, CFI = 0.996, RMSEA = 0.064 と統計学的な許容水準を満たしていた。また、本尺度における α 信頼性係数は 0.859 であった。(表3)

4. 「困難の楽観的解釈」と「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」の関係 (図2)

「困難の楽観的解釈」が「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」を規定するとした因果関係モデルのデータに対する適合度は、図2のとおり、 $\chi^2(df) = 297.240 (136)$, CFI = 0.938, RMSEA = 0.094 と統計学的な許容水準を満たしていた。パスの推定値およびその有意性検定の結果、「困難の楽観的解釈」は「生きる意味 ($\beta = 0.722$, $p < 0.001$)」「関係性における調和 ($\beta = 0.515$, $p < 0.001$)」と有意な関係を示していた。また統制変数と「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」の間では、年齢が「関係性における調和 ($\beta = -0.254$, $p < 0.05$)」に有意な関係を示すことが確認さ

れた。

なお各潜在変数に対する説明率は、「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」のうち「生きる意味」が 54.4%、「関係性における調和」が 31.2% であり、「困難の楽観的解釈」で 6.6% であった。

IV. 考察

1. 「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」の妥当性と信頼性

本研究では、在宅で要介護状態にある高齢者を一人で支援するホームヘルパーが持つべきスピリチュアルな感覚として「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」を測定する尺度の因子構造の検討を行った。回答分布から、本研究の対象者のほとんどの者が肯定的な回答をしていた。特に、第2因子の「関係性における調和」においては、約9割の者が肯定的に捉えていたことから、人生における意味より、他者との関係性を重視していることがうかがえる。

また、この2つの概念に対して2因子斜交モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて確証的因子分析を実施した結果、統計学的な水準を満たしていたことより、因子の妥当性が支持された。また、信頼性を示す Cronbach の α 係数からも内的整合性(信頼性)を有していると判断した。

よって本尺度は、「人生における意味と他者との関

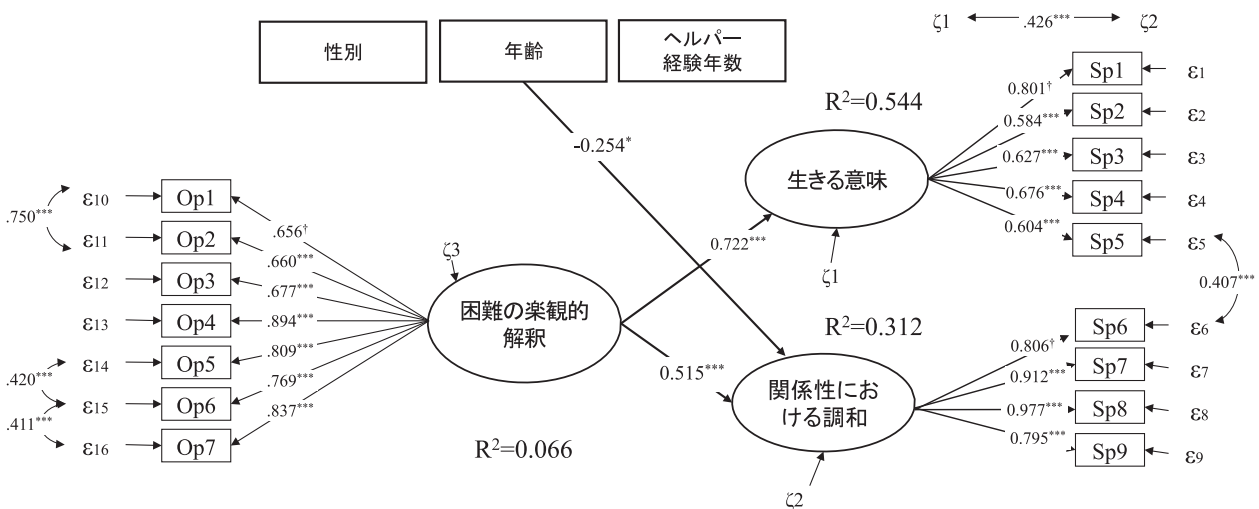


図2 ホームヘルパーの困難の楽観的解釈とスピリチュアルな感覚の関係 (標準化解)

n = 135: $\chi^2(df) = 297.240 (136)$, CFI = 0.938, RMSEA = 0.094 (推定法: WLSMV)

※ε, ζは誤差変数 ※†はモデル識別のために制約を加えた箇所である ※***: $p < 0.001$, *: $p < 0.05$
統制変数からのパスは有意なもののみ示した

係から見出す調和や絆」と定義された「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」を測定する尺度として十分な妥当性と信頼性を有しているといえる。

2. 「困難の楽観的解釈」と「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」の関係

本研究で「困難の楽観的解釈」と「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」との関係を検討した結果、「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」の中でも「生きる意味」と強い正の関連が見られ、また「関係性における調和」とも関連が見られた。

まず、「生きる意味」との関連に関して、この生きる意味は、竹田らが開発した高齢者版スピリチュアリティ健康尺度¹³⁾の定義の中にも、「スピリチュアリティは人生の危機に直面した時に意識化するという性質を持つが、日々の平凡な日常生活においても存在する」とある。「生きる意味」の概念は、長い人生で様々な経験から学んだ結果、今自分自身がこの経験を意味あるものとして意識づけ、今後活かしていこうという意思がうかがえる。この概念には直接的な否定的経験や困難という概念はみられないが、うまくいった経験ではなく、むしろうまくいかず困難状況を乗り越えてきた経緯のその延長上に、人生の意味を確認したり、感謝する気持ちが高まるのではないかと推測できる。

一方、「関係性における調和」においても「困難の楽観的解釈」と正の関連がみられ、「生きる意味」同様に利用者との業務上起こり得る困難な状況に対してホームヘルパーが自分なりに、試行錯誤を加え、利用者からの無理な要求にも誠実に耳を傾けて解決すべき課題であると捉えていく態度と共に高まることが予測される。

3. 「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」に関連する要因

統制変数と「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」の間では、性別やヘルパーとしての経験年数は関連がみられず、年齢が「関係性における調和」に有意な関連を示すことが確認された。スピリチュアルな感覚の2因子とヘルパーとしての経験年数に関連がなかったことは、スピリチュアルな感覚は単に経験だけでなく、職業的に特有な経験をすることと関連している

ことを示唆しているといえる。これは本研究で得られたホームヘルパーの業務に起こり得る様々な困難な経験をどう意味づけしているのかといったことつなると考える。

また、一般的には、加齢と共に「関係性における調和」が高まると推測されるが、本研究では年齢とは負の関連を示したことにに関して考察を加えておく。本研究の対象者の平均年齢は46歳と要介護の立場である高齢者の世代とは一定の差がある世代である。本研究結果では、この30歳代から50歳代のホームヘルパーのうち、50歳代の者が30歳代の者より「関係性における調和」の得点が必ずしも高くなかったということのみが明確であった。このことから今後はさらに幅広い年齢層の対象者に追試をして確認する必要があるといえる。

V. 結論

本研究では、ホームヘルパーが認識する、ストレス対処としての「困難の楽観的解釈」が「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」に関連していることが明らかになったといえる。このことから、様々な業務から生じる困難に対する認識を前向きに捉えるといった楽観的な態度や意識が、業務を通じて培われ、死に直面している要介護高齢者をケアする者が持つスピリチュアルな感覚を持つことに寄与するという予測ができる。

竹田¹³⁾は「身体的、心理的、社会的側面の健康の有り様は、「自己の存在の意味・目的」を問い、追求するというスピリチュアルな作業を行うことにつながる」と述べている。このことは、身体、心理、社会レベルにおける健康の概念とスピリチュアルな感覚が別の次元の概念ではなく、それらの連続上に生起する意識であるという見識が成り立つ。また、スピリチュアルな感覚を検討することが健康本来の意味を追求することにつながると思う。

本研究は横断的調査であるため、関連要因との間に因果関係があるとはいえない。よって、今後は「ホームヘルパーのスピリチュアルな感覚」が長い業務経験の過程の中でどのように生起するのか、何をきっかけに認識されていくのかといったことを捉えるため、質

的分析や縦断的研究によりその知見を蓄積していくことが今後の研究課題となる。

謝辞

本調査の実施に至り、ご協力いただいた A 県訪問介護事業所の訪問介護員の皆さま、及び各施設長の皆さまにこの場をお借りして感謝申し上げます。また、本研究の調査実施に対してご協力をいただきました大阪市立大学、岡田進一先生、清水由香先生に感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) <http://www.Stat.go.jp/data/topics/pdf/topics90.pdf>, 統計から見た我が国の高齢者（65歳以上）総務省、(2015) (2018. 9. 10)
- 2) 内閣府 http://www8.Cao.Go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/zenbun/s_1_1_1.html 平成28年版高齢社会白書（全体版）(2018. 9. 10)
- 3) <http://www.Mhlw.Go.jp/stf/shingi/2r9852000001oxhm-att/2r9852000001oxlr.pdf>, 厚生労働省老健局、地域包括ケアの推進（介護保険事業状況報告（2014））(2018. 9. 10)
- 4) http://www.mhlw.Go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000044899.pdf, 介護保険制度を取り巻く状況 社保審-介護給付費分科会 第100回、資料2、(2018. 9. 10)
- 5) 岡本裕子「ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究1—高齢者介護による成長・発達感とその関連要因の分析」『広島大学教育学部紀要』第二部、46、1997年、111-117頁。
- 6) WHO 憲章における「健康」の定義の改正案について http://www1.Mhlw.Go.jp/houdou/1103/h0319-1_6.html (2018. 9. 10)
- 7) 藤井美和、李政元、田崎美弥子ほか「日本人のスピリチュアリティの表すもの：WHOQOL のスピリチュアリティ予備調査から」『日本社会精神医学会雑誌』14(1) 2005年、3-17頁。
- 8) 三澤久恵「地域高齢者のスピリチュアリティ評定尺度の開発：構成概念の妥当性と信頼性の検討」『日本健康医学会雑誌』18(4)、2010年、170-180頁。
- 9) 浅賀薫木、戸矢主子「これからの社会福祉系専門職教育に求められるスピリチュアリティを土台にした「死生観」の涵養：第一福祉大学学生へのアンケートを通して考える」『第一福祉大学紀要』5：2002年、1-14頁。
- 10) 岡本宣雄「高齢者が生活上経験するスピリチュアルなテーマに関する研究；生きる意味に焦点をあてた質的研究」『川崎医療福祉学会誌』25(1) 2015年、37-47頁。
- 11) Selingman M, Steen T, Park N. et al. "Positive Psychology ; Progress/Empirical Validation of Interventions." *American Psychologist*, 2005, 60(5) : 410-421.
- 12) 広瀬美千代「ホームヘルパーの楽観的態度に関連する要因の検討；構造方程式モデリングを用いて」『厚生指針』62(11) 2015年、25-31頁。
- 13) 竹田恵子、太湯好子、桐野匡史、ほか「高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発；妥当性と信頼性の検証」『日本保健科学学会誌』10(2) 2007年、63-72頁。
- 14) 豊田秀樹「共分散構造分析 [入門編]」朝倉書店、東京、1998年。
- 15) 小杉孝司、清水裕士、押江隆ほか「M-plus と R による構造方程式モデリング入門」北往路書房、京都、2014年。
- 16) 田中寛子、鈴木幸子、辻あさみ「化学療法を受けるがん患者に関わる看護師の年代別における支援：職業的アイデンティティとストレス・コーピング、職場内のサポートの関連」『日本医学看護学教育学会誌』23(2) 2014年、6-12頁。
- 17) Muthen LK, Muthen BO : Mplus User's Guide Fifth Edition. Los Angeles, Muthen and Muthen, 2007.
- 18) Hu L, Bender P "Cutoff Criteria for Fit Indexes in Covariance Structure Analysis" *Conventional Criteria versus New Alternative. Structure Equation Modeling*. 1999, 6: 1-55.
- 19) 山本嘉一郎、小野寺孝義編「Amos による共分散構造分析と解析事例」ナカニシヤ出版、1999年、16-17頁、京都。
- 20) 松尾太加志、中村知靖「誰も教えてくれなかった因子分析：数式が絶対出てこない因子分析入門」北往路書房、162頁、京都。